ONE PIECE～その男、正義を求める～

中山

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

憎しみからは何も生まれないという奴がいるがそれは違うと俺は言える。憎しみからは殺意が生まれる。それが強ければ強い程、強い殺意に変わる。――だから、俺は人を殺した。強い憎しみを持って。

目　次

第零話 ―――― 1
クロウの過去 ―――― 3

第零話

　此処は東の海のとある島。
「見つけたぞ、〝色鬼・クロウ〟!」
　そこには海兵という白を基調とした服を身に纏う男達がおり、その男達の上司が声を張り上げた。そこにいる、異様な雰囲気を放つ男に対して。
「おうおう、何だよテメェ等。歓迎会でも始める気か?」
　男は紫色の髪をしていた。そして、上半身には何も着ておらず、下には黒いズボンとそれに合わせたかのような黒いサンダル。これだけで判断するとただの変質者にしか見えない。
「〝世界政府への反逆〟及び〝天竜人虐殺〟の罪で逮捕する!」
　男のボケを無視して海兵は襲いかかる。海兵の上司は男の情報を教えてはいなかった。と言うよりも、その上司は男を捕まえれば自分が出世すると言う事で興奮していて忘れていたのだ。所謂、無能な上司とはそういう奴の事をいうのだろう。まぁ、知っていた所で未来は変わらないが。
「ハァー、少しはツッコミ入れてくれてもいいじゃねぇかよ。なぁ、そこの海兵さん」
「な、なんだ!」
　戦闘中に会話をするのは馬鹿のする事だ。しかし、この海兵はまだそれを知らない。新兵だからだ。まぁ、その新米をさっそく戦闘にいれるのは馬鹿のする事だからしょうがないとしか言いようがない。
「お前、色は何色が好きだ?」
　男の意味の分からない質問に海兵は考える。
「あ、赤?」
　新米の海兵は吃りながらも答える。
「へぇー、んじゃ〝赤〟でいくか」
「え?」
　海兵が間の抜けた声を出しても仕方が無い。何故なら男の姿が変わったからだ。

最初、男は適度に伸びた紫色の髪をしていた筈だ。だが、今はどうだ？髪が赤く染まっている。そして、何よりも目を引くのは”尖った”爪と頭から生えた”二本の角”。

そこで海兵は理解する。男が”鬼”と呼ばれる所以を。そして、自分の死を。

「色鬼、赤。『熱恋慕―ネツレンボ―』」

男はそう言い、海兵の頭を小突く。

すると、海兵はパァンという音と共に弾けて死んでしまった。

「新米の海兵には、まだ燃えるような恋は早かったかな？」

男はそう言いながら、顔についた血を舐める。

「う、うわぁぁぁぁぁ！」

仲間が一人、無惨に死んでしまったからだろうか。残りの海兵達が隊列を乱しながらも襲ってきた。

そんな状態では男を倒す事など出来ない。故に、また一人、一人と死んで逝く。

「あぁ…あ…あぁ。い、いやだ、死にたくない！た、頼む、殺さないでくれ！」

最後に残ったのは上司のみ。そして、その上司も

パァン

――――弾けて死んだ。

そして、男は呟く。

「あぁ、無常」

――と。

男の名前はクロウ。かつて、世界政府に所属する一人の天才によって作られた人間兵器だ。

クロウの過去

此処は誰も知らないとある基地。
そこに、幼いクロウはいた。当時クロウは海軍に所属していた。
親はいない。その代わり、親代わりはいた。いや、親代わりと言うより、兄貴分と言ったほうが良いだろう。
名をＤｒ．カディル。彼を知る者は彼をこう呼ぶ。
歴史に乗せる事が出来ない天才化学者と。

「おう、兄貴。今日は何の実験してんだよ」
クロウは齢１０歳にして少将と呼ばれる地位にいた。クロウは歴代きっての天才少年と言われる程の強者であった。
クロウは暇な時、よくこうしてカディルの所に行く。クロウがカディルの事を兄貴と呼ぶのには理由がある。
当時のクロウは自分と同じ天才と言われる男に興味を持ち、会いに行った。その時、見たのだ。
男の浪漫とも言えるもの。即ち

――――巨大ロボットを。
その日から、クロウはカディルを兄貴と呼ぶようになった。
「ん～？今回は何と！悪魔の実を食べた者がカナヅチにならない方法だ！」
「は？」
何て言ったこの天才は？と、クロウはそう思う。
悪魔の実と言われる者を食べたものは海で溺れてしまう。これは鉄則にして絶対。その事実を覆そうと言うのか。
「まぁ、失敗したんだかな！ハッハッハー！」
「当たり前だ、天才化学者。そう簡単に事実が覆って堪るか」
クロウは中指を立てて馬鹿にする。
「その代わり、悪魔の実の能力を手にいれ、かつ、海楼石などの弱点の効果を効かなくする改造人間は造れる理論は出来たがな！」

「んなにいいいいいいっ!?」
（覆す處か悪魔の実を馬鹿にしやがった！）
クロウの顔が驚愕に染まった事に満足したのかカディルは満足気に頷く。
「いやぁ、見つかったのは偶々なんだがな」
ラッキーラッキーと言いながら笑うカディル。
「ハァー、相変わらずだな。んで、実験はどうすんだよ？」
「したいんだけど、これには条件があるんだよ」
いやぁ、残念。と、カディルは呟く。
「へぇ、その条件ってのは？」
クロウがそう聞くとカディルが待ってました！と言わんばかりに顔を輝かせる。
「条件は三つ。一つ目は悪魔の実を食べた事のない者。二つ目は精神力の強い者」
クロウは此処でふと気づいた。
（あれ？俺当てはまってる）
クロウは悪魔の実など食べた事がない。精神力の方は一度、クロウを疎ましく思った海兵によってインペルダウンにぶち込まれた事がある。それによって鍛えられた。
「そして、最後は１３歳から１０歳までの男」
此処まで聞いてクロウは理解した。
「なぁ、もしかしてだが、俺に実験体になれって言ってる？」
「うん！」
取り敢えず、顔面をぶん殴っといた。
「イテテ、酷いなぁ。報酬はちゃんと弾むってのに」
その言葉に少し耳がピクッとなるクロウ。
「因みに報酬は？」
因みにを強調して言うクロウ。そして、その様子を見てまだまだ子供だなと、思うカディルは言う。
「クロウ君専用の武器」
そして、クロウはこう言った。

――やります。
カディルはニンマリと笑った。

クロウがカディルの実験体になって二年が過ぎた。クロウは見事に能力者となっていた。悪魔の実に当てはめて言うならば『オニオニの実』を食べた鬼人間と言える。
『オニオニの実』の能力は以下の通りだ。と言っても一つしか分からないのだが。
・色鬼
この色鬼と言う能力は、色から連想させる事象を起こす事が出来る能力だ。例えば赤、これから連想されるのは熱いとか炎とかだろう。
つまり、色鬼は熱を発生させたり、炎を出したりする事が出来るという訳だ。
この能力のお蔭でクロウは海軍大将までになった。二つ名は”紫鬼（シキ）のクロウ”。これは死期とかけられていた。

そして、クロウが海軍大将になってから更に三年後。とある事件により、クロウは海軍を辞め、犯罪者となった。